注目！ インクルーシブ教育

写真は朝日新聞 2 月 27 日朝刊。「インクルーシブ教育 内海千恵子さんに聞く」。

リードから―米国務省が、政治や経済、人権などの各分野のリーダー候補者を米国に招待する「IVLP」（インターナショナル・ビジター・リーダーシップ・プログラム）。障害の有無によらず、誰もが地域の学校で学ぶ「インクルーシブ教育」をテーマに参加した名古屋市在住の内海千恵子さん（30）に、米国の現状と日本の課題を聞いた。

注目！

インクルーシブ教育 内海千恵子さんに聞く

「分ける」学校 差別生む

地域で共に学ぶ環境必要

貴重な情報と、示唆に富む鋭い指摘が多い。内海さんの発言を抜粋して紹介したい。

米国での視察から。「州によって違いますが、米国は全員が普通学校に行くことを「インクルージョン」と定義し、障害がある人もない人もいる、自然な社会の比率を学級内にも反映させることが重要とされていました」「原則は地域の学校で、特別支援学校は選択肢の一つです。日本のように、入学から卒業まで「分ける」のではなく、行ったり来たりできます。サンフランシスコは公立校の約 5 万 7 千人のうち 12%の生徒に障害がありますが、全員が通常学級に入ります。生活が難しい場合は離れることもありますが、必要な支援を探った上で戻ることもできます。」

さて、日本は。「文科省は、障害がある子どもが通常の学級で学ぶことをうたう一方、特別支援教育も推進しています。本来、「インクルーシブ」とは誰もが排除されない、という意味です。私たちは県重度障害者団体連絡協議会として毎年 1 回、障害の有無に関わらず共に学ぶ、本来のインクルーシブな教育を実現するように県教委に要望しています。米国で視察した学校のように、「分ける」ことが前提ではなく、障害がある子どもたちが、どうしたら地域の学校で共に学べるかを考えてほしいのです。」

「障害のある人たちと関わる機会がないと、特別な存在だと思い込んでしまう。差別や偏見は「分ける」ことから生まれると思います。幼いころから障害のある人がいる環境に育てば、差別や偏見は少なくなるはずです。本来の意味でのインクルーシブ教育がやはり大事だと思います。」

心に響く言葉がつづく。内海さんには昨年 12 月 3 日「みんなの学校」上映会&シンポジウムでお会いした。シンポジウム司会をつとめたが、このインタビューのような発言

も緊張してお聞きした。こうして書き写しながら、二つのことを考えた。

トランプ大統領は分断・差別をあおっているが、障害者差別やインクルーシブ教育がどうなるか不安になってくる。アメリカ国民の各州ごとの長きにわたる伝統と「草の根の力」を信じたい。

内海さんが言う「本来の意味でのインクルーシブ教育」について。やはり大切なのは、はじめから「分ける」という発想からの転換だ。「みんなちがって、みんないっしょ」。障害のある子と共に学ぶことの積極的な意義だ。映画「みんなの学校」を見て、感じたことであり、映画では物足りなかったことでもある。子どもたちが成長し、社会で活動していくうえで、インクルーシブ教育の価値がもっと評価されるべきだと思う。

（2017 年 3 月 2 日）